

越後西川町の画家・伝川白道子の紹介

岡村浩

一、

新潟県旧西蒲原郡西川町は、所謂『町史』をもたない。平成十七年に新潟市に編入・合併した他市町村には、何れも発刊がある。そのような問題を顧慮し『町史』に代わるものとして、『西川郷土史考』発行を目指す途次を、新潟大学教育学部研究紀要(第11巻第1号 人文・社会科学編)に「越後西川町の地域文化財とコミュニティ」と題し拙文を投稿した。

前稿で指摘したが、改めて調査をすると後世に記録したい画家を、町内では多く輩出している。

- 多賀 春塘 (一八〇〇?〜一八七九)
- 多賀 二峰 (一八二四?〜一八九七)
- 加藤 狂涛 (一八四三?〜一九一三)
- 多賀 春洞 (一八四七?〜一九一三)
- 熊倉 光好 (一八六二?〜一九三七)
- 伝川白道子 (一八八八?〜一九六三)
- 白倉 嘉入 (一八九六?〜一九七四)
- 渡辺 更響 (一八九七?〜一九四五)

の八人である。本稿では就中、伝川白道子について入手し得た資料に基づき、人と作品の概要をまとめるものである。経歴を綴ったものは、何種か刊行されている郡志の類にはみられない。

二、

白道子は、同郡出身の尾竹竹坡(一八七八〜一九三六)に師事した南画家。地元西川中学校を会場にして、昭和五十年代にライオンズクラブ行事の一環で遺作展が開催された。しかし当時の記録は残らず、今日作品を探してみると殆ど見当たらない。管見の限り作風は、朦朧体を駆使した哀愁を画面一杯に漂わせる、秋景色の如きものが印象深い。

御子息によれば、「糸の切れた風の如く」(談)画家を目指し上京後は、音信不通になったという。したがって略歴をまとめることは、困難に思われた。

一方、地元郷土史に精通した御方からの伝聞に、會津八一、そして相馬御風と親交があったらしき旨をうかがった。裏付ける資料がかつて残っていたのであろう。近頃それと思われるものにたどりつけたので次に紹介、改めて分析してみたい。

- ① 白道子写真
- ② 色紙一枚
- ③ 相馬御風文「白道子の芸術」
- ④ 御風推薦文(③文の自筆・S15・5/29付)
- ⑤ 相馬御風宛白道子書簡(S18・4/20付・注1)

- ⑥ 武者小路實篤推薦文 (S 28・5・注2)
- ⑦ 小林存推薦文 (S 28・仲秋・注3)
- ⑧ 會津八一葉書二枚 (S 8/25・8/29・注4)
- ⑨ 八一書 白道子への為書
- ⑩ 伝川嘉蔵宛白道子書簡 (S 5・3/9・注5)
- ⑪ 白道子宛柴山氏葉書 (S 29・8/23・注6)
- ⑫ 原泰一郎推薦文 (S 27)
- ⑬ 白道子妻宛原安一郎葉書 (S 31・1/22付)
- ⑭ 白道子作頒布会申込書
- ⑮ 墨画院出品者目録
- ⑯ 尾竹竹坡とその兄弟 (見開き二頁・書物のコピー)

三、

上記より注目したい資料に言及する。

① 白道子写真

ペレー帽、メガネをかけた人物の顔写真。後掲資料(注8参照)によると、身長は小柄とある。

② 色紙一枚

白黒のコピーによるため把握し難い点もあるが、雪山を描き手前に雪の積もった枯木。木の下方に入江、水際に一頭の小犬を添える。文頭に哀愁漂う秋景が印象に残るとしたためだが、本作もそれに通じる寒枯森閑とした冬景色である。

③ 御風文「白道子の芸術」

白道子個展案内状の巻頭に印刷されたもので、よって少なくとも二回、銀座ギャラリーを会場に個展が開かれたことが判る、重要資料である。二枚何れも年を入れないが御風推薦文に続く「伝川白道子君の個人展覧会について」を読むと、第一回は昭和十六年十二月七、八、九日に、二回目は不明。⑤資料に従えば昭和十八年十二月十四、十五、十六日に三回目が企画されたものと推定出来る。出品目録を載せる、案内状全文を引用

してみる(旧字体のまま)。

第一回展

白道子の藝術

相馬 御風

一たび地殻より迸り出た清泉は岩を傳ひ草かけをくぐり林に隠れ斷崖を飛下しあらゆる困難と闘ひ辛酸を嘗めひそやかにつゝ、ましく而も常に全力をつくしつゝ、たゞ一途進むべきに進みいつかは白日光の漲る廣野に現はれて萬人の渴を醫し萬頃の耕土を潤さずには措かない 唯獨の道をひたむきに進む人の歩みは貴い わが傳川白道子のこれまでの歩みは正にそれであつた 眞の画人らしい画人の風格を私は白道子に見た 白道子は私と同じ郷土越後に生れ育てられた人であるが白道子の画に於て北越の自然は生かされた

白道子の画には詩がある 宗教がある それは形だけの裝飾ではない生きた第二の自然である

私は白道子の藝術を魂の藝術であるといひたい さらびやかな裝飾画が街頭に氾濫する現代に於て白道子の画の如きしめや

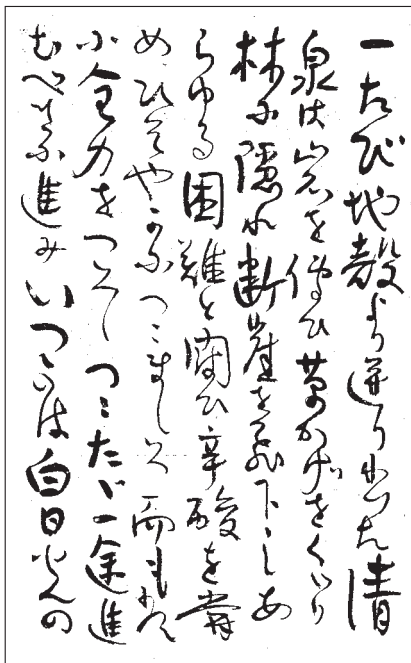


図1 御風推薦文(部分)

かなる画の前に獨靜に座して心を養ふ人をこそ眞の趣味人であると私はおもふ。白道子の作品は必ず近き將來に於てその眞價を天下に發揮するであらう。私はそれを信ずる。

傳川白道子の個人展覽會について

今度親友傳川白道子君の南画個展を催すことになりました。

白道子君は稀に見る人格者で画風に良く現れて居ります。

永年苦節を克服して繪筆に生き世に隠れて居りましたが白道子君の不抜の努力になる作品を廣く世の中に送りたい切つたる希望を以て潜越ながら主催者として御挨拶旁々御多忙中誠に恐れ入りますが是非御來場の上御批評下さる様御願ひ申上げます。

主催者 川上嘉市 相談役 坂本浩三

会場 銀座ギャラリー（カネボウ横通）京橋區西銀座三丁目一番地

會期 十二月七、八、九日 自午前九時 至午後八時

目録

柿と栗 白梅

新竹 柿

村の秋 秋の聲

二日月 沼の幸

畑の幸 脊戸の春

遅日 春雪

竹林 小春

霜月頃 湖村の春

湖畔

東京市板橋區南練馬町一ノ三五一九 傳川白道子

第二回展

白道子の藝術 相馬御風（一回展と同文のため略）

傳川白道子の第二回個人展覽會について

大東亞民族にとりまして最も銘記すべき昭和十六年十二月八日大詔換發の日に奇しくも傳川白道子君の世に隠れたる作品の第一回個展を開催いたしましたことは同君のスタートに大なる感激と強大なる力を與へたこと、存じます。

この忘れ得ざる感激に鞭打ちて精進せる作品が完成いたしましたので後援者各位の御懇意により第二回傳川白道子個展を開催致す運となりました。就きましては御多忙中誠に恐れ入りますが是非御來場の上御批評仰ぎ度御挨拶旁々ご通知申上げます。

主催者 川上嘉市 相談役 坂本浩三

会場 銀座ギャラリー（カネボウ横通）京橋區西銀座三丁目一番地

會期 十二月十四、十五、十六日 自午前九時 至午後八時

目録

越路の冬 富岳山水

湖畔の秋 高原の秋

山家の春 秋晴れ

静物 静物

東京市板橋區南練馬町一ノ三五一九 傳川白道子

出品作は風景画ばかりで山林・静寂な風味を想起する画題が揃い、これまでみている作品と重なる。注目は御風が白道子の推薦文をかように綴っていることで、「ひそかにつつましく」、「白道子の画には詩がある、宗教がある」、「しめやかなる画の前に独靜かに座して心を養ふ人をこそ眞の趣味人である」と私はおもふ」とあるのは、御風が良寛に対峙した時の讃辭、例えば「あたたかなすがすがしい春風に吹かれながら靜かにほがらかな鳥の声に聴き入るやうな」（祭文）等に大いに通じる言である。時に第二次世界大戦の火ぶたが切られる頃、この日を期して個展を企及した旨が案内文に読めるが、白道子の作風には氣負つた筆勢は全くみられない。

幸いこの活字になった**推薦文の御風自筆**が残る、画帖らしきものに六枚、昭和十五年五月二十九日付、当時御風五十六歳。署名の形状は風がまえの横線が水平からやや右下がりがみえを呈し、一般にみるこの時代の書きぶりと同じもの。左右への振幅の強い律動的な佳書である(図1)。

さらに⑤**御風に宛てた白道子書簡**一通がある。ペン書便箋六枚に及ぶ長文で、昭和十八年四月二十日付。白道子は東京都板橋区練馬南町(南練馬町)に在住。糸魚川の御風を先般突然訪問、それ以来の御無沙汰をまずわびる。この年二月二十六日入院中の妻が亡くなって落ち着くまで、諸事手に付かなかったという。重要な記述として、同年十一月八、九、十日の三日間、「例の如く銀座のギャラリー」で**第三回個展**を開く運びとなり、題材は全て武蔵野を描く。そのために当地を歩き廻っていると伝える。また三条市の画家を志す大湊氏なる人物を御風が白道子に紹介したらしく、対して白道子は大湊氏のことを「世間一般の画家気質などとは凡そ駆け離れた良い素質と性格を」もっていると将来性を賞讃している。「ただ一筋に御互ひに好きな風雅の道に遊ぶ心で向上の一路を辿り共に楽しく手を取りあひながら心のふるさとを彼岸に求めつつ行末永く漕ぎ進まない歩みをつづけて往きたい」と記すあたりは、御風の心の琴線に触れる言辞であろう。「宗教がある」「しめやか」「独静」と白道子の画業を、御風が評したことと符合する。

如上の白道子の書簡には一般に難解な用語が点在し、教養の一端がしのばれる。またペン字の書きぶりは処々変体仮名を用いつつ、淡々と文字を連ねるもの。

そもそも多忙を極める御風が、今日無名に等しい画人の推薦文をまとめているのが不思議なのだが、この長文書簡を窺うと面会を含む直接的やりとりがあった上での作文だったことが判明する。

⑥武者小路實篤の推薦文。これは、實篤個展に白道子が姿を現わしたことが初対面。白道子は自作を實篤に見せたらしく、「古画の筆法を丹念に追及されて」と実篤から讃辞を書き与えられた。「こつこつあるいてゆく」とは大きな社中で徒党を組むのではなく、個展を柱に自己を世に問う姿勢を評したものだろう。實篤だけではなく次の小林存、この人物は新

潟市内にあつて民俗学の道をやはり個人で切り開いた人物で、奇行が多く伝わる。また會津八一も同じく新潟市内に身を寄せつつ、教養を背景に有する文芸書作を展開していたが、人柄は小林存同様極めてアクが強い。このような、揃って近づき難い人物三者に白道子が面会し一定以上の好評を博したのは、自身の構えを明確に打ち出した独往を目指す画業が三者から賛同を得たのだろう。

⑦小林存の「白道子の個展に餞す」と題す七言絶句詩。「下筆の情奇、めに塵を受けんや」「天真、新を用いず」等の語は、白道子の真を評しているのだろう。この存の筆跡は大抵短歌、若しくは句書だが、本書のような詩書は大変少ない。また書風も縦横配字が揃い、字の大小も均一になつており、他作にみる気の赴くままに筆を揮つたものとはひと味異なる、改まった趣の点が珍しい。

⑧會津八一の葉書二枚。これは年が不鮮明ながら昭和二十八年の八月二十五・二十九日付けと文章等から推察される。

⑨葉書は八一書「古道照眼色」五字、「傳川君鑑 秋艸道人」と為書の入った墨書が、贈られた経緯が読み取れる内容の手紙なのである。先の實篤と存同様の画帖に書いてもらったもので、この四字を個展案内状に推薦文代わりに印刷に付して用いたのであろう。その印刷物を八一がみて四字目を「顔」とすべきところ、「眼」と誤記したことに気付き、原因が白道子の長時間に及んだ面会によると弁明した内容。手紙によれば、白道子が東京から新潟市の八一を訪れ、その場で揮毫した作ということになる。弁解の如き葉書を出したところ、住所表記に不足があったため、返送となつてしまい、一緒にもう一度送り直すと走書したのが二通目(八月二十七日付)の方である。当時八一は老齢のため体調不良の日が多く、面会を断る記録が日記や書簡に散見される折、それを許された白道子だった。かねて知己であつたかは判明しないが、残る筆跡は雄魂に筆線の暢達した佳品で、押印はご丁寧に三顆、何れも七十歳古稀の祝いに刻された山田正平製の名印である。八一も充分配慮して揮毫したもののみた。

⑩親戚宛白道子書簡(S5:3/9付)は、便箋二枚墨書からなる。候文を駆使、書き慣れた言葉、つかいである。宛先は自分の故郷実家に住む実

郵便 八日廿九日
 白津
 東京都大田区
 池上徳持の十二
 阿部明方
 傳川白道子宛

本町一丁目
 池上徳持
 阿部明方
 傳川白道子
 宛

郵便
 東京都大田区
 池上徳持の十二
 阿部明方
 傳川白道子宛

東京都大田区
 池上徳持の十二
 阿部明方
 傳川白道子宛

拙者 近來血壓高きため、疲
 勞し、殆ど面黄を湖總し、
 貴下、來訪に當り、特に破天
 荒の長時間、面黄し、疲勞
 甚しかりし、かゝり見え、
 帳一、酒のたる、文句に重、大、
 誤りある、た、ある、
 不、完全と、別、能、返、
 謝、
 白津

是、
 日、
 の、
 有、
 下、
 は、
 來、
 又、
 白津

図2 白道子宛八一葉書二枚（全文）



図3 八一書

弟で、そこで養ってもらっていた息子・昇について手元に引き取りたいもの、今秋日本南画院に大作を出品し同人(審査員)を目指す都合、もう少しそちらで面倒をみてもらい、進学させてほしい旨を綴る。自分の体の方は苦しまされたりユーマチも回復のきざしあり、制作に意欲的に向かう反面、家族が犠牲になっている。こうした家族と離れて暮らしたことは、数年前に西蒲原の御身内の方より聞いた話と一致する。この頃下墨田区谷中に転居、長らく東京生活を続けていた。

⑬柴山氏なる御仁が白道子に宛てたハガキ(S29・8/23付)。三越本店で個展開催を希望する白道子の願いに応えようと、宮家を仲介者に紹介している。注視したいのが、この時の白道子住所が「西蒲原郡巻町九区」であること。戦後故郷近くに居を構えていたのである。

⑭伝川姓の女性宛、原安三郎なる御仁の葉書(S31・1/22付)。墨書達筆による寒中見舞状で、原氏は別に白道子を讃える⑯墨書一句を寄せている(S27)。

女性は家族と思われるが、宛先の住所は「調布市深大寺町」で、前掲⑪にみたように、この頃白道子自身は巻町に居住していたのだが、二年後再び上京したのだろうか。

上京の有無については不明だが、関連しそうなもので⑭白道子作頒布会申込書に次の如くある。

此のたび白道子 東都復帰につき有志の御後援を願ふため左記により作品の頒布を仕り候 何分の御援助を願ひ上げます

色紙 三千元

尺五横 一万円

尺八横 二万円

二尺横 三万円

御承諾の際半額 作品出来の際半額

白道子東都復帰後援会

続いて申込者の署名と、申込作の寸法を各自が墨書している。一人目は「世田谷区 大湊吉平」で、⑮御風宛白道子書簡に出てきた、御風の紹介した人物である。申込書巻頭の但し書きは、大湊氏の筆によると思われる。芳名帖を廻覧し、結果、二十六人の署名が残っている。人物の判明するのは、北聆吉一人。年月が入っていないものの頒布価格から際して、戦前分ではないだろう。

⑯は杉並区高円寺に事務所を置く「墨画院」の案内・出品目録のようなもので、傳川白道子・小柳創生・横内大明・水谷宗弘・島村亮・古淵雅信・高柳淳彦・藤谷是境の計八人の名が並ぶが、御覧の通り筆頭に白道子の名前を載せることから、代表的存在だった可能性がある。四人の作を挿入、白道子は「山の幸」と題し長芋を三本、土の香りを漂わせる。

四、

以上が筆者の新しく入手した資料(コピー)である。紹介した原物・原

本の所蔵者は不明だが、書簡類が残っていることから白道子の身内に伝わったものであろう。

これら資料を用いて白道子の調査を試みられた方がおられる。新潟市在住・市村玖一氏(注7)で「新潟日報」(S52・12/7付)文化欄に、「一誤字に気をやむ 會津先生、失念の一書」との見出しが付いた寄稿に調査の概要が読める。御風推薦文から實篤との接点、そして八一の「古道照顔色」誤記のあらましに触れ、断片小作にいたるまで八一が自筆に責任を真摯にもついていた姿勢を讀める結びになっている。

入手した⑤御風宛白道子書簡コピーには、糸魚川歴史民俗資料館での調査を行った痕跡がみえる。同館資料目録を確かめると、この書簡の存在は整理掲載してあった。

とくに八一、実篤、存の書はいずれも同じ画帖を持参し、即席でしたためてもらったようである。幸いコピーによっても諸氏とのやりとりは充分伝わるが、原本伝世の確認を是非とも願って調査を続けたい。

拙文冒頭に記したように、筆者の興味はまず御風と八一との接点があった地方画人の、その交流の有様を窺いたかったのである。考察の結果、点描ながら、地方の一人画人が相当志を高く抱き積極的に行動し、地元西川町(天竺堂)から出て東京都下を転々としつつ、戦時中より少なくとも銀座で三回、戦後三越本店での個展開催をもくろんだこと、そのための支援を同郷の御風、存、八一、また實篤といった名家に揮毫依頼していたことなど、白道子の作家活動の概要が浮き彫りになった。

五、

加えて次にこれまで地元西川町で見出していた資料を紹介する。

⑰『西蒲・曾根郷ゆかりの文人集(三三)』(H26刊)。平成二十六年十月日西川町で開いた文人展の図録で、筆者の編集による。色紙二枚、条幅三枚、肖像写真一枚、経歴(文)を収める。殆ど白道子三男・浩氏から提供を受けた。作品は全て淡彩を施し、ほぼ同時代に制作した近似する画風。三点は秋景色で、紅葉のあざやかさと対比し、他の箇所は薄暗く、晩秋



図4 白道子作「心の故里」

の静けさを思わせる。文字は「白道子」と署名を付すのみだが、一点「心の故里」と記入した例がある。「白道」と署名を付記した樹林大幅(233×144cm)は、先の文中にあった力を尽くし個展に出品した作の類と考えられる。これは地元親戚に伝わったもので、画材など出費のかさむ生計を援助すべく、身内が作品を購入した例が他にもあっただろう。こちらには、条幅作数本が併せて伝わっていた。

経歴を記す文には比較的若書き壮年期の記事が読め、はじめ「大我」の雅号を使用していたことが判明した。丸メガネは同じだが、前掲写真と異なる若い頃の顔写真と、樹葉を細密に描いた山水画を文に添えており、名鑑類に掲載されたものである。文を次に引用する(旧字体に従った)。



図5 白道子と初期山水作

大我 傳川喜三二

別に幽外、克と號す、明治二十一年三月二十五日新潟縣西蒲原郡鑑鄉村天竺堂に生る、幼にして畫を好み最も俗事を忌む、ゆえに家業を相續せず、畫を以て身を立てんとし初め郷關にありて諸派の筆蹟を臨摹して自ら研究し、後東京に出で、尾竹竹坡に師事し其畫法を修め刻苦精勵、其技大に進み嶄然頭角を表はす、殊に人物、花鳥、山水を描くに妙を得たり、帝國繪畫協會の會員にして、現に東京府下日暮里千六百五十五番地に住す

⑱『西川郷土史考』と傳川白道子』（拙稿・『石州』H30・2月号所収）。地元親戚の方より御教示頂き、白道子の家族について簡述、三回忌に開いた回顧展（S40・10/27・10/28）の趣意書（注8）を紹介、ここに晩年は巻に仮寓したと記している。

六、

結びに、重複する内容もあるが⑳資料に記した家系に言及しつつ、知り得た白道子の足跡をまとめてみる。

明治十七年（一八八八）三月二十五日、新潟県西蒲原郡鑑鄉村天竺堂の伝川嘉七とカト（慶応元年生）の間に生まれる。本名は喜三。祖父豊作（天保十三年生）が明治四十二年に隠居後、家督を継ぐ。時計工に就職するも好きな画道に傾倒して、上京後同郡生まれの尾竹竹坡に師事。三度の破門の末、東京・大阪・信州に転住。

昭和十五年には相馬御風が白道子に推薦文を書き与える。これを用い昭和十六年十二月、第一回個展を準備開催。第二回は翌年、そして白道子の御風宛書簡によると第三回は、手紙をしたためた昭和十八年十一月に予定された。

武者小路實篤が昭和二十八年五月、小林存が同年仲秋に白道子個展への推薦文、餞別を与えている。よってこの年近くにも個展が準備されたと思われる。

また昭和二十九年八月二十三日付の柴山氏の白道子宛葉書から、銀座三越本店での個展開催を高松宮殿下周辺の紹介を経て企画している。二十八

年と思われる八月二十五、二十九日付會津八一葉書によると、やはり白道子個展推薦を目的とした「古道照顔色」五字を書き与えたものの、「顔」を「眼」字に書き誤り、さしかえを求めめる手紙文になっている。この時白道子は大田区池上徳持町の安倍氏方に間借りしていたが、そこから新潟市南浜通の八一を訪問、長談義からの疲労の結果誤字をしたのだと、八一に「将来は一切面會謝絶」と通告を受けている。

後年西蒲原郡巻町に住むも、再度上京、最期は川崎市上作延で昭和三十八年（一九六三）没。昭和四十年三回忌供養のため、遺作展を巻町公民館において開催、三十点余りの陳列があった（注8）。

のち昭和五十年代、三男浩氏が西川町議会議員を務めていた関係上、白道子遺作展が西川町ロータリークラブ周年記念の一環として開催された。

なお初期の雅号は幽外、克ともいい、のち大我、白道子と変えて用いた。幽外・克時代の作は過眼していない。大我時代の作では花鳥をみた。後年、白道子作はもやのかかった幻想的な画面で、上空には鳥が点描されたり枯木が中心であったり、季節は秋冬景色のイメージが強い。八一書に「古道照顔色」とあったし、實篤の与えた文に「古画の筆法を丹念に追及されているのを見た」と記す点からも、白道子の学究の姿勢は古画の臨模を主としていたと推察する。画面の沈潜した風趣は、あるいは中国宋代のものに



図6 後年の白道子

依拠しているように思われる。

江戸期から続く西川町の割烹・天川屋は伝川姓で、白道子の子ども二人が養子に入ったが、事情があつて家業を継ぐことはなかった。しかし、有力な後援者の御一人であつたと思われる教示を同家より受けた。

今後の課題として異画会（注9）・日本南画院展に所属した時代の出品履歴の追求と共に、遺作の発掘を念頭に置きたい。

文末ながら天川屋、伝川浩様ご家族、佐藤克巳様、大橋三郎様より貴重な資料をご提供頂いた。心よりお礼申し上げます。

注1 御風宛白道子書簡

「拝啓 其后誠に失礼なる御事とは存じながら遂御無沙汰いたして居り何とも御侘びの言葉も御座いません。何卒御寛容の程御願ひ申し上げます。

また先般帰省中は突然参上一方ならざる御厚情を蒙り其節はまた誠に結構な御筆まで頂きまして川上さんにも特の外御満悦にて誠にありがたく御礼申し上げます。

さて此頃は春漸くたけなわ閑となり先生にも益々御健かに被為渉皇国文化の発展の為め御尽悴の御事と御慶び申し上げます。

就ひては私事未だに何等の御知らせもいたしませんでしたが実は永らく入院中の病妻事過ぐる二月廿六日（私がまだ郷里に滞在中）武蔵野病院より突然死亡の電報に接し廿七日の夜行で急遽帰京、以来其の後始末やら其他の俗事俗用などに取紛れ少しの落ちつくいとま違もなく遂うに〳〵日を過ごして仕舞ひました。

此頃は漸く気を取り直し一切を精算して大死一番力強い更生の新しい第一歩を印する覚悟で元氣一杯大地を踏みしめて雄々しく立ち上りたい欲求がさへ切れない潮の如くに湧き上つて来るのをひし〳〵と身を感じ何とはなしに胸の引き締まるやうな思ひがいたします。

今秋第三回の個展期日は十一月の八、九、十日の三日間、例の如く銀座ギャラリーで開くことに極まりましたので制作準備のため此頃は天氣の好い日は心の赴くままに任せて所構はず武蔵野を歩き廻つて心行くまで武蔵野

気分浸つて居ます。

また此のたびは先生御呢懇の大湊吉平氏を御紹介下され三條市は私の郷里からは僅かに五里程しか隔てて居ませんので一入の親しさを覚えます。木から落ちた猿のやうな現在のさびしい私には何より嬉しく懐かしく思へてなりません。ほんとは私などまだ□生なのですから何にか少しでも御役に立つやうなことであればよいのですが、などと□をいい考へてみますと私には只何にかしら御恥しい思ひがいたします。けれどもただ一筋に御互ひに好きな風雅の道に遊ぶ心で向上の一路を辿り共に楽しく手を取りあひながら心のふるさとを彼岸に求めつつ行末永く漕ぎたい歩みをつけて往きたいと思ひます。素よりこの道は教ゆべからざる以所（所以）の義を語り合ふより他に別の方法とてはないやうにも思はれます故、ただ各自その天分に順がひ、解衣槃礴の心境に退歩して遊戯三昧の真境地に到り得るならば何時かは自然に真芸術の本道を開かれ四通八達自在に創造の力が湧き起こつて来るのではないかと私は今そのやうに考へさせられて居ます。もしも幸にしてこれからの私の貧しい画生活の体験が少しでも大湊さんの画生活の上に他山の石となるやうなことがありましたら私にとりせめても喜びです。

大湊さんは世間一般の画家氣質などとは凡そ懸け離れた良い素質と性格を有つて居られますから将来益々素直な研究を進めていかれたら楽（し）める人だと私は思ひますので将来に期待をかけて居ます。偶然とは申しながら：は動機こそ私とは異なつて居ましても宛も期を同じうして同じ心に結ばれ相共に輝かしき更生の門たる思ひもかけず道づれにならうとは宿世の因縁の然らしむる所、世の中は誠に不思議と申す外なく何れは神仏の加護かとも思はれて私ほただ〳〵感激して居ります。

幸にして私も相変わらず何時も元氣で張り切つて居ります。ただ時局での事とてくさ〳〵の俗事俗用に攻め立てられ貴重な制作の時間を次ぎ〳〵浪費させられることが今の私にとりて何よりの悩みですけれども今年こそはどんな犠牲を払つても十二三点以上の作を陳列しなければと思つて居ます。

今年の作品は全部武蔵野を題材といたしますけれども、数年前からの先生と御約束が未だに果たせませんでした、今年には陳列させて頂きます。そ

して表装のまま御届けしたいと思つて居ります。
尚時局柄御身大切に益々御健勝の程御願申し上げます。
取り急ぎ乱筆にてお詫び申し上げます。

敬具

昭和十八年四月廿日

白道子拝

相馬御風先生

御許へ」

注2 實篤書

「白道子君 僕の個展に忽如とあらはれた 始めてお逢ひしその画を拝見した 古画の筆法を丹念に追及されてるのを見た その遠き道を今の世にこつこつ歩いてゆく姿に何ものかを感じ 氏の前途の多幸を願つた

昭和二十八年五月 武者小路實篤」

注3 小林存推薦文

「饒白道子個展 榮楼学人 存

下筆情奇豈受塵

風流尚古合前人

丹青一路君明解

把住天真不用新

昭和廿有八年仲秋一夜匆忙走筆」

注4 八一葉書二枚

「先日は失礼致し候。今日御印刷物を見るに拙者の『古道眼色』とあるは『眼』は須く『顔』でなければならず候。実は拙者血圧高く近來文字誤脱甚しく候。貴下と極めて長時間談話のため疲労の致すところと存じ候。このハガキをかか帖に挿入なし被下度候。」

「拙者近來血圧高きため、疲労し、殆ど面会を謝絶し居るに、貴下は來訪に当り、特に破天荒の長時間面談し、疲労甚しかりしものと見え、御示しの帖へ認めたる文句に、重大なる誤字あるため、早速御注意申し上げます、

そのハガキも、アドレス不完全とて、別紙返し来りし故、改めて附箋して差上候。かかるありさまなれば、将来は、一切御面会は致さざること致すべく候。とにかく誤字の所は御切り棄て下されたく候」

注5 親戚宛白道子手紙

「御手紙被下難有拝見仕候 如仰春寒未だ去りがたく候処 御全家皆々様 弥々御多祥之由何より喜敷存じ候 小生義(儀)正月以來ロウマケス(リュウマチ)にかかり永々仕事も出来申さず医薬に親しみ居る処 此頃灸にて漸く快方に赴き少しづつ仕事も出来得る様に相成り喜び居り候 就いては今度昇義小学校卒業いたし高等小学校か中学へ入学の手続き被下度候に付ては行末大学又は美術学校其他の専門学校等へ入学せしむるに付 是非中学校を卒業せしめ置く必要有之候事故 実は小生も本年より東京へ呼び寄せ度様存じ居候処 小生も今度南画院同人より実力を認められ愈々同人にミタテせられる事故 今秋こそは半年がかりの一大力作を南画院に出品いたし一躍同院の同人(審査員)となる予定に御座候 其為めに多大の制作費用を要し候へ共 成功の上は小生もいよゝゝ大家の列に加へられ候事故 自他共に弥々幸運に有之候 御迷惑ながら昇義今一年の御厄介御願申上候 昨年制作は(巾四尺、丈ケ八尺)今年正月首相官邸に参り濱口首相に献上いたし居候

次に今月十六日制作の都合上、**下墨田区谷中初音町四一八(初音湯前)**へ

移転仕候間 一寸申上置候

先は取急ぎ御願旁、御返事まで 皆々様へも宜敷御願申上候

嘉録君へも宜敷御伝芳被下度候

昭和庚午三月九日

敬具 伝川白道子

伝川嘉蔵様」

白道子には徳次郎、裕松、嘉蔵、伝吉、嘉録、為七の弟と、ヨシ、ヨセの妹がいた。書簡の宛先は嘉蔵(M24生)、文末に嘉録の名もみえる。子どもは昇(T6生)、至(T9生)、浩(T12生)の三人。書簡は長男の養育に関する依頼である。

注6 白童子宛柴山氏葉書

「残暑さびしき折から先生は益々御健勝の御事と存じ上げます。いつも御無沙汰ばかりいたしましたして申訳も有りません。御許し下さいませ。扱て過日三越本店にて個展の件ですが、要□の人物にて寺岡海軍中将(元)、高松宮殿下、(武官終戦時軍務局長) 殿か宮殿下に御紹介下さるそうですから一度御都合を見て後上京下さいませんです(か)。御待ち申上げて居ります。私宅は渋谷より都電にて光林寺下車反対側です。 敬具」

注7 架蔵に市村氏著『新潟県農民運動史』(S50・中村書店刊)があり、著述経歴に上越市生、県内中・高等学校校長歴任とある。

注8 〈趣意書〉を引用する。

「郷土が生んだ画壇の稀才白童子伝川喜三二画伯が川崎市上作延で亡くなられたとの訃をきいたのが一昨年の昭和卅八年の夏八月でした、行年七十九、旧鑑郷村天竺堂に生れ、はじめ時計技工となられましたが志を画道に求めて円山派尾竹坡画伯門にはいられました、居ること数年、三度破門をうけたと呵々大笑せられておつたことが昨日の如くに憶われますが子の風格を語るに足るエピソードであります。

東京、大阪、信州に移り住みその間一時は巽画会に加はつて異彩を放ち、ついでは日本南画院に属して眞に苦節五十余年自ら孤高を持し、ながらいえに独自の画格を開かれました、晩年は当地巻を静安の假寓としてますます古画の筆法を追究しつつ「越後のローカルカラー」をと：幾多の製作を残されました。

白童子先生逝いてすでに三年、菊花の好季左記によりまして各位の御愛蔵の御出陳をいただいて遺作展を催し短軀長髪の子が異容を追憶しながら諸名品をあらためて静かに清鑑するの機を得たいものと念ずるものであります。御協賛を申し上げる次第であります

昭和四十年十月十七日

記

卷町公民館長 樋口弘雄

一、伝川白童子画伯遺作展覧会 卷町公民館主催

二、十月二十七日、二十八日(二日間)

三、於卷町公民館階上会場

四、遺作品 三十余点(幽外、大我、白童子の三期)」

注9 巽(たつみ)画会は明治二十九年(一八九六)に、深川在住の村岡応東、遠山素香、大野静方の三人により創立。南米岳が手腕を振るい、鎗木清方、菱田春草、山田敬中、今村紫紅、木島桜谷、菊池契月、上村松園、尾竹竹坡と国観、山内多門、町田曲江、安田鞞彦、田中頼章、小室翠雲等を審査員に招き展覧会を催す。青年画家の発表の場となった。

日本南画院は江戸期の南画を基礎として、大正十年全国の南画家が結集して創立される。三井飯山、河野秋邨、小室翠雲、水田竹圃、矢野橋村、松林桂月等による。

例として『日本南画院展覧会図録』には、第十回展(S6図録発行)に白道子は「村童遊喜」を発表。十一回展(S7図録発行)に「春」、十四回展(S10図録発行)には「三原山」を出品。「三原山」作は地元で伝わっている。縦110×横130センチメートルに及ぶ大作。注5書簡文中に、日本南画院同人を目指し制作に没頭している記述があったことと符合する出品記録である。

付記

脱稿後、大橋三郎様より巻頭に触れた昭和五十年代の西川中学校における白道子展について、昭和五十三年(一九七八)五月二十八日、越後西川ライオンズクラブ認定状伝達式行事の一環として行われたものであるとの御教示を得た(『西川町史考 その27』H11刊)。追記すると共に資料のご提供に謝意を表したい。